フェリス女学院と同じように、この明治女学校にも、新しい時代にめざめたたくさんの若い女性が学んでいました。この二つの学校に学ぶ生徒たちにとって、賤子はあこがれの人であったのです。

翻訳家として

まだ結婚前の二十三歳のとき、賤子は『女学雑誌』に『旧き都のつと』という小文を発表しました。それをきっかけにして、結婚してから、つぎつぎと作品を発表しました。

『世渡りの歌』『野菊』『お向ふの離れ』『すみれ』『イナック＝アーデン物語』――作品は、自分で作ったものだけではなく、外国の物語を翻訳したものや、外国の詩をもとにして物語に作りかえたものなどもありました。いずれも、すぐ